

統治とケイの活動

— 19世紀における国民教育論出現の可能性の条件 —

上野 耕三郎

ケイの『マンチェスターの綿工業に雇用されている労働者階級の道徳的ならびに肉体的状態』

1832年に一冊の小冊子が出版された。100頁あまりのこの小冊子は『マンチェスターの綿工業に雇用されている労働者階級の道徳的ならびに肉体的状態』¹ (以下『マンチェスターの状態』と略)と題されていた。著者はジェームズ・フィリップス・ケイ (1842年にはジェームズ・ケイ=シャトルワースとなる)であった。よく知られているように、かれは1839年には枢密院に創設された枢密院教育委員会の初代事務局長となり、教育行財政をはじめ、教員養成制度、視学制度など多岐にわたる施策を自ら手がけ、イギリス近代公教育制度の礎を築くことになった人物である。

ケイはスコットランドのエディンバラ大学で医学を修め、その地で貧民街の医療活動に携わった後、活動の場を産業革命の中心地であるマンチェスターへと移すことになった。その地でも貧民街において積極的に医療活動を繰り広げる一方、1831年には同市の衛生委員会事務局長に就くことになった。それと軌を一にするかのように、ヨーロッパに発生した悪性伝染病のコレラがマンチェスターにも襲いかかり、その悲惨な状況を目の当たりにして、かれはコレラの撲滅をめざして立ち上がった。

都市を恐怖に陥れたコレラは、「その犠牲者を社会のあらゆる階層から選び出してきたにもかかわらず、病氣、精神的不安によって、また生活の安らぎや施設がないことによって健康を悪化させている人々の間で主として広まりを見せて」(強調は引用者、以下断りのない限り同様)いた。だが、上層階級

の人たちは貧民の棲む街に足を踏み入れたこともなかったし、そのようなことをしようとは夢想だにできなかった。かれらは社会の底辺にうごめく貧民の悲惨な現実に触れたこともなかった。しかし、「死のメッセンジャーの歩みを追うことを義務としている人は、貧困の棲み家に降りてゆかなくてはならないし、袋小路、ごみごみとした路地、人であふれかえっている汚らしい住居をしばしば訪ねなければならない。そこでは貧困と病気が群れ集まり、大きな町の中心で社会的不満と政治的無秩序の原因となっているが、社会のど真ん中で秘密裡に育っている悪を、疫病の温床のなかで、しっかりと見据えるべきである。」² こうして、コレラという外部からの侵入者を撲滅するために、貧民の状態についての調査が統治の俎上にのぼってくることになる。

「マンチェスターでは家々や街路の状態を詳細に視察するために、14の警察管区のそれぞれに、衛生委員会 (Boards of Health) が組織され、これらの地区は細かくセクションに分けられ、それぞれに2人あるいはそれ以上の人数の調査官が近隣のもっとも尊敬できる住民のなかから任命された。かれらには、それぞれに割り当てられた家々や街路について、調査されるべき一覧になった質問事項が手渡された。」³

コレラを監視し撲滅するために、地域にたいして格子状になった医療ポリスの網がかけられ、ケイや調査員らはそのように区分けされた地域に分け入り、「病気、精神的不安そして生活の安らぎや施設」などの、ありとあらゆるとも形容できる情報や統計を収集することに努めたのである。ケイの手によるその報告書が『マンチェスターの状態』であった。

『マンチェスターの状態』における調査

その報告書はこういうことばで始められている。

「汝自身を知れ」は古代の哲学者の格言によって説かれているものだが、

個人にたいして勝るとも劣らないほど、社会にもふさわしい教訓である。私たちは肉体的ならびに道徳的災厄に取り囲まれているが、その存在にはっきりと気づけば、いたってかんたんに避けることができる。さらに社会の間違いや病気の源が何であるかがわかれば、社会の徳や健全さはたいして苦もなく保持できる。⁴個人が自己自身についてよく知れば、おのずと自己の統御は可能である。それと同じように、社会もまたそれ自体についての知識を所有していれば、肉体的ならびに道徳的災厄の被害を免れることができるはずである。だが、ことはそうかんたんではない。というのも、動物と社会とは決定的なちがひがあるからである。ケイは両者を比較し、その相違を指摘している。「動物組織の感覚中枢は、そこに各器官の知覚が収束するのだが、知覚のあらゆる変化に気づくようにできている。そしてどのようなちょっとした病気もその繊細な知覚力を逃れることができない。こうして痛みは災厄の存在を私たちに明らかにするが、それが進行するのをとどめることができない場合は、生命活動の源へと知らぬ間に侵入することになる。」⁵このように動物は「感覚中枢」という生来の機能を所有しており、自分の生命活動を脅かす危険を察知することができるが、社会はそのような生来の機能を所有していない。したがって、この人間社会では「道徳的ならびに肉体的災厄が共同体のひとつの階層を抑圧しているが、それについての知識は、動物と較べ不安全な手段しかないので、そのような災厄とは遠く隔たっている階層にはゆっくりとしか伝えられない。そういうわけで、部分的な悪弊が全社会組織を震動させ脅かすまで、それを除去するために全般的な努力はけっしてなされない。」⁶この欠落した機能を補うために、ヨーロッパのいくつかの国では特別な措置を講じることで、そのような情報や知識を得ようとしていた。プロシア、オランダ、スウェーデン、フランスは人口、労働、商業や農業の実状、資源、税制、財政などに関して、詳細にわたる統計調査を実施した。確かに、それらの調査には重要と思われる調査対象が抜け落ちており、社会のすべての事象が網羅されていたわけではない。だが、ひるがえってこの国の調査を顧みて、ケイはこう言う。

「そのようなシステムがたとえ完全なものではないにしても、この国に導入されたどのようなものよりもはるかに優れたものである。この国では統計はないがしろにされている。そして緊急事態によって特別な調査が必要とされる際にも、情報は下院委員会を介して得られる。その仕事はたいへん多方面にわたっており、たいへん雑多であり、一般的結論の調査以外に少しも時間を割く余裕がない。その一般的結論は、その問題にもっとも精通しているとされている人たちの経験から引き出されたものである。こうして真理へと近づくことはできたかもしれないが、その結論は統計調査から得られたものほど細かな点までは正確なものではない。結論は相対立する証言を比較することから、ときには一方の証拠からだけ引き出されており、それらは一つの最も重要な点で、すなわち、かれらが主張している事実を一般の人に納得させるのに、まったく失敗している。」⁷

だが、コレラの侵攻を防ぐためには悠長なことは言うてはられない。まづもって調査が必要であり、調査対象についての情報や知識が求められたのである。

「製造業者は労働者階級の状態に関して一般的知識をもっていなければならない。にもかかわらず、貧民の肉体的・道徳的改善のためには、上層階層による詳細にわたるパーソナルな関与が必要である、ということがコレラの到来以前には今ほど確信されていなかった。今や新しい領域が開かれ、製造業者は自分たちの身の安全のためにはそこへと関心を払い、その領域でもっとも活動的な慈善心が広まりを見せ、徹底的に作用し尽くされることになるだろう。疫病はかれらの都市にあり、かれらの戸口そのものにあり、ごみごみとした工場を毎日襲い、その犠牲者をかれらの側から運び去っている。すべての過去の計画——すべての過去の尽力は無駄なものであった。新しい病気の影響を被らないように大衆

を引き上げるためには、情け深い関与をあたらしく発展させることが必要である。この精神に則って、コレラの侵入を予想して、大きな町の街路や家々の査察が熱心にかつエネルギーになされた。住人のシンパシーと熱望がいかに強力に喚起されたかがそのことを物語っている。』⁸

少なくとも、調査は情報と統計知識をもたらし、それが統治への途を拓くことになったことを、ここでは見ておくだけで十分であろう。

『マンチェスターの状態』についての評価

ジョンソン (Richard Johnson) はかつてバーミンガム大学の現代文化研究センター長を務めたこともあり、イギリスにおける文化研究の先駆者のひとりである。かれはグラムシ流の「文化」、「ヘゲモニー」という概念を用いながら、19世紀から現在に至るまでのイギリス教育の歴史研究に、新たな境地を開いたことでも知られている。かれによれば、ケイや視学官がその報告書で記したものは四つのテーマが繰り返し現れている。ひとつは、長期的に見た場合、経済的变化はかならずしも否定的でマイナス要因となるものではなく、潜在的には大衆に恩恵をもたらすものであること。二つめには、労働者階級の行動様式に対する激しい告発。三つめには、労働者階級の家庭が機能不全に陥っており、その代替機関が必要であること。そして最後に、その代替機関、すなわち初等学校とその教師は強い統制のもとに置かれるべきことであった⁹。ここでは最初の二つについてかんたんに見てみよう。

ケイが教育へと関心を引きつけられたという意味で、『マンチェスターの状態』は記念碑的なパンフレットであるが、かれは自分が分け入り観察したおどろおどろしいマンチェスターの惨状を、社会診断医として描いている。「商業システムの必然的結果ではないが、そのヴァイタリティを脅かすことがないとしても、そのエネルギーを駄目にしてしまう病弊」¹⁰ (強調は原文ではイタリック、以下同様) を赤裸々に描写しており、マンチェスターはまさにそ

の病弊の実物教授であった。読者を恐怖の底に突き落とすような「野蛮な自然の歩み」——疫病の発生、労働者の棲む街や家庭の不潔さ、家族生活の崩壊、犯罪、売春、飲酒、迷信、機械の打ち壊し、貧困とアイルランド人の移入（「野蛮な種族による植民地化」）——、さまざまな病弊の明らかな連鎖によって、「爆発するような激しい要素」である「暴発する暴力」が社会の構造そのものを破壊し、労働者大衆が墮落へと突き落とされる様を描いていた。かのエンゲルスもまた『イギリスにおける労働者階級の状態』のなかで、『マンチェスターの状態』を「権威ある判定者のことば」としてしばしば引用し、「確実な典拠」のひとつにしたことはよく知られている。

だが、人を奈落の底へと突き落とす病弊を描いているにもかかわらず、そのパンフレットには第一のテーマである、ジョンソン言うところの「条件付楽観主義」が底流としてあった。「一見すると、そのパンフレットを楽観的と言うのは奇妙に見えるかもしれないが」、「このペシミズムは、経済的・社会的組織システムとしての、産業社会自体についてのペシミズムではなかった」のであり、病弊は一時的攪乱であり、改善可能なものであり、その点ではまがうことなき楽観主義が支配していたのである¹¹。だからケイはこう言っている。

「商業が制限されなければ、自然の傾向は社会のエネルギーを発展させ、生活の安らぎと豊かさを増し、社会体のあらゆる構成員の肉体的状態を向上させると信じているので、……下層階級に影響を与える災厄は外部の偶然的な要因から生じる。文明の進歩を押し進め、世界に文明を広げるシステムは、……大衆の幸せと矛盾するはずはない。」¹²

攪乱は一時的なものでしかないし、それによって工業の自然な歩みが「邪魔されて」ただけである。とすれば、この産業社会を支配するシステムを「正しく管理すれば」、災厄は「完全に」取り除くことができるはずである。しかし、そのような楽観主義が可能になるためには、いくつかの条件を満た

さなければならぬ。それが「環境」と「道徳」である。

『マンチェスターの状態』では、ケイはある時には環境主義者としての顔を見せ、社会構造への飽くなき改善を主張している。だから「ケイは環境主義者として読むことができる。押しつけられた状況とそこからほとんど必然的に導かれる行動パターンとの間の難解な相互関係のもつれをほどこしている。……分業の「道徳的」影響の分析では、かれはアダム・スミスから借用し、マルクスを彷彿とさせる。災厄についての単純な一元論の説明を免れている。」¹³

「盾の一面のみを調べることに慣れている、先入観をもっている人がいるが、そういう人は、貧民たちが苦しめられているすべての災厄を、もっぱら貧民の無知あるいは道徳的逸脱に帰そうと躍起になっている。逆に貧民はけたはずれの悲嘆の圧力のもとで苦しんでいるばかりではなく、かれら自身の習慣から直接流れ出てくる悲嘆となるものさえも、社会の不出来な機関が貧民の性格に与える第一の影響にまで、しばしば辿ることができよう。言いかえれば、教化されていない無知が結びついた影響や、道徳教育制度によって矯正されていない悪い習慣、そして飢餓や苛酷な労働と戦わざるをえない墮落した精神の絶望的とも言える困難にまで辿ることができる。」¹⁴

ケイはこう言い、その病弊の源を環境と道徳との複合した影響にまで辿ろうとしている。だが、そう言っているそばから粗雑な道徳主義が顔を出している。たとえば、労働時間を制限する動きを「政治的藪医者」の万能薬」として斥けたように、かれはしばしば純粋な環境改革には反対していた。教育なくしては、「注がれた」時間は「浪費」され、あるいは「間違っ使われ」、「怠惰」、「放蕩」のなかで無駄にされ、「政治的デマゴグ」に「無知なる驚きでもって耳を傾ける」ことになる、と生粋のヴィクトリアン道徳主義者のスタンスを少しも崩していない。

それでは、一方では環境主義、他方では道徳主義の顔を見せているケイの二重性、あるいはその楽観主義はどこから生じてくるのだろうか。ジョンソンはその掘ってきたるゆえんをおおきくは二つのものに求めている。ひとつはスコットランド啓蒙主義である。ケイはエディンバラ大学の神学教授のトーマス・チャーマズ (Thomas Chalmers) の弟子であり、『マンチェスターの状態』はかれに捧げられていた。またケイは同大学の医学部教授アリスン (W. P. Alison) に私淑しており、かれの愛弟子でもあった。しかし、ケイにより大きな影響を及ぼしたのは、そのようなスコットランド啓蒙主義よりも、その「社会的立場」¹⁵ であり、マンチェスターの工業ブルジョアジーとの社会的つながりである。「ケイの社会的忠誠心が結局は決定的である。というのも、若き人間として、自らをマンチェスター社会の真の形成者と同一視していたからである。土地所有者ではなく、「生粋の商人」でもなく、「開明的工場主」に自分を重ね合わせていたのである。ケイはかれらと地域政治や慈善で緊密に協力していた。この明らかな階級的偏向はパンフレット自体のなかにたいへん明瞭に認められる。」¹⁶

前進する資本主義の歩みは阻害されるべきではないし、いっその発展がめざされるべきである。ケイらが激しく告発し非難した労働者階級の行動様式や古い民衆文化の再生産はその阻害要因となるものであり、その再生産のサイクルをどこかで断ち切っておく必要があった。このように考えると、「初期のヴィクトリアン道徳主義はいわれのないブルジョアの逸脱ではない。この種の文化的攻撃は、資本主義の発展のこの段階にたいしては、有機的なものであった」ということも肯けよう。言うなれば、これは階級—文化統制である。このことを背景として、この時期のリベラルな社会政策を見てみると、「エドウィン・チャッドウィック、ケイ博士、ナツソウ・シーニョアのような人々は、全体としての資本の長期的利害を見通す知覚力を持っており、かれらの心では意識された戦略と一部はなっていたのである。」¹⁷ ケイが示した分析は、この産業ブルジョアジーの長期的な利害に立脚したものであり、資本主義のいっその発展をめざしたものである。その阻害要因たる労働者階級

文化の再生産を阻止し、労働者階級を統制することを、現今の病弊解決のための指針として提示していたのである。階級—文化統制としての教育の目的と、それへの期待は、ケイがマンチェスターで緊密な社会的つながりをもっていた産業資本家の階級利害にまで辿ることができ、その階級利害がイデオロギーを介して『マンチェスターの状態』のなかに反映させられていたことになる。

国民教育は産業ブルジョアジーによる全面的猛攻撃の一環であり、ケイはそのイデオログであり、かれがつくりあげようとした教育制度は、労働者階級に固有な「本当に役立つ知識」あるいは人間の全面的発達へと敵対するもの、つまり、労働者階級文化に対する悪意ある統制とみなされている。もう少し言うならば、私たちを解放へと導いてくれるものは労働者階級文化、「本当に役立つ知識」であり、今はまだ潜在的なものであるが、やがては労働者階級のヘゲモニーのもと、全面的に花開いていくものであった。ここに「文化」への期待を読みとることはあながち間違いではないであろう¹⁸。

統治性とは何か？

これにたいしてハンター (I. Hunter) は新たな視角から国民教育を分析しようと試みている¹⁹。その分析の武器を提供したのがフーコーの統治性という概念である。フーコーはその後期において統治 (government) あるいは統治性 (governmentality) ということばを用いて、過去3世紀にわたって西洋で形づくられた支配の問題構成を再検討しようとしていた²⁰。ロウズによれば、その出発点となるのは、統治の対象がどのようにして、いかなる場所で問題構成され、そのなかでいったいどのような目的が練りあげられ、追求められるべきとされたか、ということであり、統治はそのようなことと関連づけて分析されるべきである。あるいは、さまざまな権威が、いかなる戦略や技法を用いて、どのようなことを生起させたいと考えていたのか、ということから、統治の問題を分析し始めることが必要である。個人であれ、はた

また集団であれ、歴史上の一時期に、ある特定の行為にたいして、どのようにして関心が払われるようになり、いかにして問題として構成されるようになったのか。そして、そこにどのような対象が出現するようになったのか。その際にどのような権力や偶発的出来事が問題構成に関わっていたのか。まづもって、そういうことに関心のベクトルを向けることが、統治を分析するための出立点である²¹。言いかえれば、統治性とは「支配を行使する人々が自らにその支配の理由、正当化、手段や目的について、そして支配を駆り立てる問題、目標あるいは野心について問いかけをしてきた様式」ということになる。ここでは統治あるいは統治性は、さまざまな政治的合理性 (political rationalities) と関連づけて考えられている²²。とすれば、政治的合理性としての統治性は、「現実を表象し、それを分析し、それを矯正するための理想的構図を形づくり、正当化する」ための実践として分析されることになる。

このような統治の実践においては、「現実を表象する」ことばの役割は「第二義的なものではない。ことばは統治行為を叙述可能にするばかりか、それを可能にするものである」からである。統治されるべき対象——国民、人口、経済、社会、コミュニティ——、そして統治されるべき主体——市民、主体、個人——についての特定のことばを編み上げることによって、はじめて現実には思考可能なものとなり、管理へと開かれてゆくのである²³。ここでは、ことばは現実を思考可能な存在へと変換し、行政的な管理・関与へと開くための一連の「知的テクノロジー」として理解されている。したがって、この点では、統治の分析は歴史的エピステモロジーと深く結びついており²⁴、権力—知—主体についての研究領域と重なり合っており、「最も一般的に言えば、権力／知識の近代的作用についてのすべての研究が位置づけられるような領域を示している。」²⁵

統治はまた、理想化された計画を人間や集団の意志によって現実のなかに植え付けることではなく、「さまざまな権威は、戦略や技術や手続きを介して、統治のプログラムを組織する」のであり、統治性は統治テクノロジーと切り離せない関係にあり、「戦略や技術や手続き」と関連づけて分析されるべきも

のである。

「意志の行為によって現実のなかで理想化された計画を実行するという問題ではなく、さまざまな(法的、建築的、専門的、行政的、財政的、裁判の)力、(表記法、計算、試験、評価などの)技術、(調査や図表、訓練制度、建築様式などの)装置の複合的集合体であり、個人、集団、組織の決定や行動を権威ある基準と関連づけて規制しようとするものである。」²⁶

国家機構・装置へと組み込まれた統治テクノロジーや道具は、国家や階級に起源をもっているわけでもなく、統一性ももっていないのである。したがって、統治性の特徴のひとつはすべてを外部のもの——経済、政治、イデオロギーなど——へと還元することなく、問題構成が生じた周辺で、その問題構成へと寄与したもの——コレラ、戦争、暴動、技術的变化、新しい経済力の勃興など——の複雑で偶然的歴史へと関心を払うことにあった。

繰り返せば、解決すべき問題やそのための戦略、戦術、統治計画がいかんにして構成されたか。統治を正当化するために編まれた真理——「経済」、「社会」、「道徳」そして「主体性」などについての知識や考えや信念——がいかなる条件のもとで、どのような形で出現可能になったのか。それに統治テクノロジーがいかんどのように関わっていたか。そういう問題こそが出発点なのである。言うなれば、知的テクノロジーと統治テクノロジーとしての「統治性」が、いかに支配や管理に介在していたのか、ということがまずもって問題となってくるのである。

このように定義された統治性は歴史上どのようにして出現してきたのだろうか。ディーンはフーコーの所説を言いかえて説明しているが²⁷、かれによれば、16世紀に統治性が絶対的主権(sov^ereignty)から分離し、国家に内在する活動あるいは「技法」としての統治概念が発展してくることになる。この過程で、国家の統治は自律的なものになり、専制君主という人物からと同様

に、絶対的主権についてのさまざまな形態、たとえば王権「神授」説などから遠ざかってゆくことになる。もはや統治は超越的権威の形態に基づいて領土内部で臣従 (subjects) に対して行使されるものではなく、統治されるべきものごとの性質やその「傾向」を考慮しなければならなくなってくる。ここで言う「傾向」とは「ものごとや人の空間的そして戦略的配置や、ある限定された領土内部でのものごとや人の動きの秩序だった可能性」のことであり、ものごとや人という資源を育てることで、生活手段を増加させ、その住民の幸福や繁栄を増加させ、住民数を増やすことによって、国家の富や力そして偉大さを増すことをその目的とするようになってくる。この過程で「人口 (population)」が支配の原理となり、^{バイオ・パワー}生の権力が出現してくる。いわゆる統治の「ポリス」²⁸ 形態が、政治的には19世紀初頭に出現し、領土とその住民を問題構成するようになっていき、あらゆる生活領域で人の行動が観察され、領土や住民についての知識が編み上げられ、記述され、吟味され、そして行政的な管理へと開かれてゆくことになる。

ケイの調査と国民教育——統治テクノロジー

ケイに典型的に見られるように、この時期には犯罪と教育、貧困と教育、そして労働者階級のふるまいと教育という具合に、国民教育は他の社会問題へと接ぎ木され、社会問題を改善する手段として構成されるようになった。統治性という概念に立つ限り、この問題構成をケイの知的・道徳的能力に帰すことはできないし、功利主義哲学や社会哲学に帰すこともできなかった。あるいはまた、産業ブルジョアジーの経済的ならびに政治的階級利害にもとづいたイデオロギーが、ケイの意識を歪曲するように働いたものでもなかった。もちろん、マンチェスターの産業ブルジョアジーとの社会的同盟がケイにもたらしたものでもなかった。国民教育を生みだしたものが個人や階級の意志やイデオロギーへと還元できないとすれば、いったいどこにその起源を辿ればよいのであろうか。思いだして欲しいのだが、統治性という考えでは、

主体もまたテクノロジーの所産であった。ハンターは、国民教育を編み上げたのは意識や哲学ではなく、ふたつのテクノロジーであった、と言う²⁹。

ひとつは、現在では社会福祉と総称されている領域——警察、公衆衛生、社会扶助など——に埋め込まれている、統治テクノロジーとでもいうものである。すでに触れたように、ケイが教育へと関心を抱くようになったのは、マンチェスターの衛生委員会の一員として、その地を襲ったコレラを撲滅するための活動を契機としていた。「マンチェスターでは家々や街路の状態を詳細に視察するために、14の警察管区のそれぞれに、衛生委員会 (Boards of Health) が組織され、これらの地区は細かくセクションに分けられ、」³⁰ それぞれの地区には調査票を片手にした調査員が送り込まれたのである。街路や人々を監視するために、都市空間に社会—医療ポリスの格子がかぶされることになった。その結果、人口 (population) が問題として構成され、それについての情報と知識が引き出され、そこから社会問題が編み上げられ、その矯正戦略が出現することになったのである。統治のプログラムやテクノロジーなくしては、そのような情報や知識は人間の認識にはもたらされなかったのである。たとえば、就学率や犯罪率や罹病率の知識は、子どもや犯罪者や病人が一カ所に集められ、画一的な観察手法に服するようにさせる統治装置なくしては、あるいは確率の計算技術がなくては生まれることはなかったのである。私たちは調査やその結果の数値や統計を疑問視することはなく、仮にイデオロギー的な歪曲があったにしても、それらは歪んだ形であれ現実を反映しているものと見なしている。だが、統治のプログラムやテクノロジーこそが、現実を思考可能な「存在」へと変換しているのであり、私たちの認識を生み出しているのである。言いかえれば、反映論とは違い、私たちは現実のなかにすでに存在しているものを発見しているのではなく、統治テクノロジーを介してものごとを命名することで、ものごとははじめて存在するのである。

このような視点からケイの活動を眺めると、かれは学究的生活を送っていた学者ではなく、当初からその活動の中心は、社会福祉とでもいうべき領域

にあったことに今さらながら気づかされる。エディンバラ、そしてマンチェスターにおける社会医療活動がかれの教育への出立点であり、国民教育を行政的関与に開かれるようしたのは、当初コレラの侵入によって巻き起こされた恐怖を沈静化し、その撲滅をめざして、都市空間を監視し調査する活動を契機としたものであった。ケイの行政的活動はその後も衰えを見せず、1835年には救貧法補助委員を務めることになった。その「主たる業務は、救貧行政の中央当局としての救貧法委員会の「目・耳・指」として、地方を巡回しながら有効な救貧行政の推進をはかることにあった。1847年に救貧院が設置されたときには、その名称は正式に査察官と変更されたことからわかるように、査察の業務を本分としていた。」³¹

統治テクノロジー —— 視学官

ケイが教育行政に直接携わるようになったのは、1839年に枢密院教育委員会の事務局長に就任してからである。かれは近代公教育制度の礎を築くために奔走することになるが、そのひとつの柱が勅任視学官制度の創設にあったことはよく知られている。

視学制度についてはすでに1839年9月24日の覚書では、「委員会はすべての場合に査察権を要求する。……視学官は学校の宗教教授、あるいは規律、あるいは経営に関与しない。彼らの目的は事実と情報を集め、査察の結果を枢密院委員会へと報告することである」³²と規定されていた。『勅任視学官職1839年～1849年』の著者ポールによれば、その年にケイが遂行した行政的仕事でたぶん最も重要なものは「視学官への指示(Instructions to Inspectors)」の作成であり、事務局長に任命されるやいなやその準備作業に入り、その年の終わりまでには完成を見、翌年1月4日の枢密院の会議で採用されることになった。そこで確立された様式が1862年の改正教育令まで、多くの本質的な点ではもっと後まで、視学官によって踏襲されていった³³。

ケイは「指示」のなかで査察の基本的原理ともいべきものを説明してい

る。救貧法と工場法のもとでは、すでに同様の制度が稼働していたが、それらの法律のもとでの査察官は法律の実施を監視することをその第一義的な目的としていた。「学校査察はこの点において政府と学校理事会・管理者との間の協力である。査察の主な目的は、学校側が望んでいる改善のためのあらゆる努力を援助することであり、学校の授業、運営、規律に干渉してはならないし、受け取ることをよく思わない提言を押しつけることではない。」「統制しようとするものではなく、援助がなされる地域の努力を抑制するのではなく、奨励するものである。学校理事会の協力なくしては主要な目的は達成できない。視学官は干渉する権限を持たない。望まれた時やところ以外では忠告や情報を提供するようには指示されていない。」³⁴

「指示」は視学官の義務を「明確な3つの部門」に分けることから始めている³⁵。

第一番目は補助金申請に対して、その地区を調査することであった。初等教育の手段がなく、極度の貧困から学校教育が公的援助によって全面的に提供されているような場合に、「通常の援助額以上のことが与えられるべきかどうかを教育委員会が決定する以前に、ときどき視学官に調査が託される場合がある。そのような調査は近隣の貧民の状態についての一般的調査、とくに現行の初等教育手段の質や量についての調査を必要とする。視学官はそのような調査によって得られる事実を収集し、結びつける表 (forms) を与えられる。」

第二番目は、国庫補助金を受けている学校の査察であり、「教授メソッドと内容、規律の性格」についての検査と報告である。視学官は各クラスを検査し、時間割について報告し、子どもの道徳訓練と「女性の職業教育」について特別な関心を払うべきとされている。教師は、「子どもがリラックスしているときに、その随伴者である」かどうかを、そして親の協力を得られているかどうかについて調べるように指示されている。

視学官の義務のうち第三番目は特定地域の初等教育についての特別な調査であったが、それにかんしては、指示はきわめて短くしか記述されておらず、

そのような調査が望ましい場合には、特別な指示が発せられると述べるにとどまっており、たいへん漠然としている。原案段階では、ケイは特別な調査を「統計的あるいは一般的」と定義したが、公刊された版では削除された³⁶。

『視学官』の著者エドモンズが言うように、ケイが政府とヴォランタリーな協会に自らの考えが正しいことを確信させ、その夢を実現するためには、「事実を使う技術」を駆使することが求められていた。イギリス教育へのケイの貢献のもっとも重要なものは、良き査察への信頼である。フィッチ (Sir Joshua Fitch) の言によれば、「(視学官の) 第一義的義務は公費が学校に提供されている状態を確かめ、国家がその支出に見合うだけのものを得ていることを教育局に証明することである。しかし、それがすべてではない。日々、様々な種類の学校を訪問し、注意深くそれぞれの長所と短所を観察し、様々な形態の優れた仕事を認め、教師とその困難さについて共感し、視学官がほかのところで観察した規律や教授の方法にかんして教師に助言をし、査察した学校に改善への刺激、マネージャーへの有益な助言、教師や子どもが努力をするように働きかけを残してくる。知的そして道徳的力を有益に働かす大きな余地があったり、あるいは多人数の人たちと個人的な影響ある関係を結ぶようなポストは公務にはほとんどない。この種の役職が下等なランクの一つであり、高い教養と知的能力を持った人を受け入れるだけの価値のないものと見なされる時期がやってくれば、公務にとって不幸なことである。」³⁷

視学官は伝統的社会パターンに襲いかかるカオスをまったく怖れることなく、各地へと赴き、労働者階級の棲むところへと錘鉛をたらし、学校を訪ね歩いた。こうして人口のさまざまな文化的属性が知識の対象となり、統治へと途を拓くことになった。かれらは19世紀の都市空間にたいして監視・規制の格子をかけることをめざした統治テクノロジーの一員であり、かれらの活動を介して、社会問題が構成され、それらの問題が政治的・行政的管理へと開かれてゆく矯正の関心の対象となっていったのである。あるいはまた、校舎や遊び場の状態について極めて詳細な情報をフィードバックし、校舎や教具、教師の資質と地位、用いられている教授メソッドを調べ上げると同時に、

かれらは最新の教育学や学校組織についての助言をして歩いた。視学官制度は枢密院教育委員会のオフィスで中心を占める強力な統計—道徳管理メカニズムであり、まさにポリス活動の中核に位置していたのである。統治への途を拓いたのは、階級あるいは国家権力の行使を通してではなく、統治のプログラムやテクノロジーを通してであった³⁸。

視学官は行政的忠誠心を疑問視されることはなかったし、その証言の独立性については議論となることはなかった。こうして、枢密院教育委員会はその「眼と耳」に、すなわち視学官にいかにか依存しているかを理解し始めた。1852年には「(視学官報告書)は全(教育)制度の基礎を形成した」と、「公務員」に今までになされた賛辞のうち、最大級のひとつが捧げられることになった³⁹。

ケイの調査と国民教育 — 知的テクノロジー —

国民教育へと途を拓くことになった二つ目のテクノロジーは、調査を介して導き出された統計数値を関連づける特殊な知的技法・テクノロジーであった。格子状に区分けされたマンチェスターの都市空間を、調査者が街路をしらみ潰しに調べ上げ、質問表を片手に貧民の家々を一軒一軒訪ね歩き、その質問への回答を書き込んでいった⁴⁰。質問表には労働者や貧民、そしてその家族の望ましくない行動や現象が事細かに記入されていたが、ケイがとくに関心を持ったのは、家庭生活、貧しい食事や不健康、幼児死亡率、犯罪、ジン・ショップや居酒屋へ入りびたること、安息日破り、浪費と貧困、むさ苦しい生活状態などである。そのような統計は「道徳統計 (moral statistics)」と称されていた。それらは拡大し精緻になりつつあった社会調査の網の目をとおして、統計上互いに十分な関連性をもっていることが示された限りで、かれの意識を引きつけたのである。どういうことかという、社会統計は知識 — 死亡率、投獄の頻度、識字水準、国民生産についての知識 — をもたらすことになったが、この統計上の操作のなかから統治の新しい対象が現れ

たのである。望ましくない行動とそれが起きる頻度を「無知」あるいは低い識字率とに統計的に結びつけることのなかから、これらの行動を改善・矯正する手段としての国民教育が浮上してくるのである。調査によって人口——国民の生活と労働——にかんする社会統計が収集され、それらが平均や標準からの逸脱という統計・数量スペースのなかに置かれることになった。その自然的展開として、現実は数値によって分節化され、行政的関与へと現実を開くような形態で、知識は編み上げられていった。そのような領域のなかで、国民教育は数学的と同時に社会的である標準からの逸脱を矯正する一連の手段として考えることが可能になったのである。こうして異なったさまざまな社会的領域を関係づけたものは、知的技法・テクノロジーである統計調査や計算がもたらしたものである⁴¹。

繰り返しを怖れず言えば、国家が国民教育にたいして強い利害をもつようになったのは、ケイのような主体の知的能力・道徳能力が編み出したものではなく、はたまた、階級意識やそれを生じさせる生産関係からその利害が生じてきたわけではない。そうではなく、社会福祉と総称される特殊な領域にたいして繰り返し広げられた、知的テクノロジーたる統計的調査の所産であった。ケイのような改革者は統計情報を媒介として、社会領域間を関連づけることによって、国民教育についての議論を進めることができたのである。知的テクノロジーが国民教育の「可能性の条件 (the conditon of possibility)」を作りだしていたのであり、国民教育への統治上の関心が最初に出現したのは、観察と計算のテクノロジーの展開によって形成された表面であった⁴²。

国民教育をもたらした統計的調査のことを少し具体的に追ってみることにしよう。

『マンチェスターの状態』の出版を契機として、ケイは友人たちと協力して、マンチェスター統計協会を設立することになり、その会計責任者として会の運営に携わるようになった。協会は1834年4月にマンチェスターの教育状況を調査するために、教育調査委員会を組織し、調査を実施した。その後、マンチェスター統計協会はサルフォード、ベリー、アシュトンなど各地で同じ

ような調査を実施した。かれがマンチェスターを去る前には、その報告書は公刊されなかったが、1838年の議会特別委員会での証言では、調査を主導した紳士たち、そしてかれらが雇い、学校や一軒一軒家を訪ね情報を得ていたエージェントの真摯な姿勢を高く評価し、これらの調査報告書の内容の正確さとその信憑性について太鼓判を押している⁴³。

これ以後、各地に次々と統計協会が組織され、「人間自体に関係するあらゆる事項、たとえば、人口、生理学、宗教、教育、文学、あらゆる形態での富、原料、生産、農業、工業、商業、財政、統治、まとめて言えば、人間の肉体的、経済的、道徳的あるいは知的な状態」⁴⁴についての調査が遂行されていく。これらの統計協会のうち、マンチェスター統計協会と双璧をなすのがロンドン統計協会であった。ロンドン統計協会のジャーナルの第一巻の巻頭には「序言」があり、そこには統計協会のめざすべき目的と方法が高々と謳われている。

「統計ということばはドイツ語に起源をもっており、*staat* ということばからひきだされており、英語の *state* ということばと同じこと、あるいは社会的に結びついて生活している人間集団を意味している。したがって、この協会の設立趣意書のことばでは、統計は『社会の状態や今後の方向を示すにふさわしい事実』を確証し、集めるものとされている。統計協会の目的は、原理——社会の安寧はそういう原理に負っている——を確定するという観点で、統計がもたらした結果を考察することである。」⁴⁵

「統計の科学は、他の科学と同様に、まちがいのない事実からいくつかの一般的原理を引き出すことをめざしている。その一般的原理が人間を巻き込み、影響を与えるものである。統計の科学は比較、計算、そして演繹という同じ道具を用いる。しかし、その特徴は事実を集積し、比較することによってもっぱらなされ、どのような種類の推測も認めないことである。他の科学と同様に、それは真理をめざしており、その発展と

足並みをそろえて、進んでいく。

統計家は一般的には数字や図表を好んで用いる。というのも、事實は大きな数値で表される場合は、そのような形でもっとも簡潔に明瞭に示されるし、統計家は疑問の余地を残すように演繹することには満足しないからである。統計家は各個人が自分自身で検討し比較できる素材を提供する。だが、統計家はすべての演繹を拒否し、統計は数字の列からのみ構成されている、というのも正しくはない。すべての結論は明確に証拠立てられたデータから引き出され、数学的証明がなされることが求められているだけである。」⁴⁶

統計的事実こそが人間と社会の状態を明らかにするものであり、社会進歩を規定している原理はそのような統計の集積から引き出されるものであり、統計的事実に基づき、そのような原理を引き出すことこそ統計協会がめざすべきものであった。「単なる仮説にすぎない理論や先験的な考えへの不信が強まって」おり、「社会科学の領域では、事実が正しく観察され、方法に則って区分けされ、そのような事実から原理が正しく帰納される限りにおいては、原理は適用することができる」のであり、「そういう法則は経験した実証事実を観察し、収集し、記録することのみ確認できるものである。すなわち、統計データは、地域的なものであれ全国的なものであれ、経済と法律のすべての本当のシステムの素材を構成しなければならない。」⁴⁷ 明らかに、それは政治経済学がめざすものとは違っていた。政治経済学は「原因」や「起こりうる結果」について推論するが、統計学は「社会的・政治的統治にかんして正しい結論の基礎をかたちづくることのできるような、事実群を収集し、整理し、比較することのみをめざしている。」統計はだから、「社会科学あるいは道徳科学、統計家——政治家や立法家はそれにもとづいて法律をつくったり、統治したりする原理をかれらに頼らなくてはならない——の科学に必須な観察と定義づけられよう。」⁴⁸ すでに触れたが、統計は事実の集積、整理、比較をするものであったが、そのような知識は現実を思考可能な「存在」へと

転換し、行政管理可能性へと開くものであった。教育にかんして言えば、それは国民教育の論拠となっていくものとなろう。教育圧力団体とも言うべき教育中央協会の目的を述べるなかで、デュッパ (B. F. Duppa) はこう言っている。「この巻に収められている報告によって明らかになるが、協会はすでに統計情報の収集を始めた。いままでに集められた量は少ないが、それは重要ではない。そのかさは毎日増えているが、教育とは何であるべきかをもっとも確実に示すとともに、国民教育に賛成する最大の主張のひとつとやがてなるだろう、と信じている」⁴⁹

ロンドン統計協会の「序言」では、この10年間にさまざまな議会調査がなされ、それは「統治のやり方をガイドする原理を正しく理解するためには、統計の結果が必須であるという重要な認識を立法府に与えている」し、調査の「範囲と価値では、それを凌駕するものはこの国にもない。」⁵⁰とまで言い切っている。ケイが『マンチェスターの状態』で、ヨーロッパのいくつかの国では大規模な調査が実施されているのに較べ、イギリスはその後塵を拝している、と嘆いたのとは、少なくともこの雑誌を見る限り、隔世の感がある。

統治性と国民教育

国民教育が統治テクノロジーや知的テクノロジーに、そしてそれを繰る専門家に依存すればするほど、国民教育を国家の主権と義務という観点から考えることはできなくなるし、国家の背後に想定される階級というような主体の意志へと還元できないことになる。「子どもの道徳形成を専門家による管理という領域内部へと押し込めることで、民衆学校教育は社会問題群を扱うための技術的手段と考えられていた。したがって、ケイ＝シャトルワースは、この道具を行使する国家の権利について、憲法的一法的意見を提示していなかった。手段がいかにして、何の目的のために構築されるべきかについての技術的一政治的助言にとどめていたのである。」⁵¹ 逆に言うならば、そのことによって、政治的あるいは宗教的争いからうまく逃れられ、行政的な施策へ

と邁進することができたのである。

註

- 1 James Phillips Kay, *The Moral and Physical Condition of the Working Classes Employed in the Cotton Manufacture in Manchester*. 1832 (second ed.).
- 2 *Ibid.*, Introductory Letter, p.8.
- 3 *Ibid.*, pp.19-20.
- 4 *Ibid.*, p.17.
- 5 *Ibid.*
- 6 *Ibid.*, p.18.
- 7 *Ibid.*, pp.18-19.
- 8 *Ibid.*, Introductory Letter, p.11.
- 9 Richard Johnson, *Educational Policy and Social Control in Early Victorian England, Past & Present*, No.49, 1970.
- 10 James Phillips Kay, *op. cit.*, p.79.
- 11 Richard Johnson, *op. cit.*, p.101.
- 12 James Phillips Kay, *op. cit.*, p.78.
- 13 Richard Johnson, *op. cit.*, p.102.
- 14 James Phillips Kay, *op. cit.*, Introductory Letter p.6.
- 15 ジョンソンによれば、ケイの指導下にあった枢密院教育委員会の形成は、「公務員のリクルートの様式、その社会的立場や政府内部で担った役割との間にある、より一般的な関係」の所産であった。これらの三つの要因のうち、ジョンソンの説明のなかでキーとなる役割を演じるのは「社会的立場」である。(Richard Johnson, *Administrators in Education before 1870: Patronage, Social Position and Role*, in Gillian Sutherland (ed.), *Studies in the Growth of Nineteenth-Century Government*, 1972.)
- 16 Richard Johnson, *Educational Policy*, p.103, James Phillips Kay, *op. cit.*, Introductory Letter pp.8-11.
- 17 Richard Johnson, *Notes on the schooling of the English working class, 1780-1850*, in Roger Dale *et al.* (ed.), *Schooling and Capitalism*, pp.49-50, 岡田与好もケイのパンフレットをこう評価している。「B. サイモンのことばを借りると「工場プロレタリアートの状態についての最初の真相暴露」とも言うべきものであるが、この真相暴露の目的は、社会的害毒の元凶として資本家の工場制度あるいは機械制大工場を糾弾するのではない。むしろ逆であって、暴露された諸害悪工場の必然的結果ではなく、工場制度にとって外部的な、かつまた偶然的な原因によるものであり、正当な処理によって、この制度のもとで完全に除きうることを明らかにするのが、その目的であった。そしてその救済策は、結局、第一に、自由貿易体制の達成、第二に、公教育の拡充に求められたのであった。それは、いわゆる自由主義的改革の本格的始動期にふさわしい統計的研究であり政策的提言であった。」(岡田与好『自由経済の思想』東京大学出版会、1979年、54頁。)

- 18 Richard Johnson, 'Really useful knowledge': radical education and working-class culture 1790-1848, in John Clarke, Chas Critcher and Richard Johnson, *Working Class Culture: Studies in History and Theory*, 1979.
- 19 Ian Hunter, *Rethinking the school: Subjectivity, bureaucracy, criticism*, 1994.
- 20 M. Foucault, Governmentality, in Graham Burchell, Colin Gordon and Peter Miller (eds.), *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*, 1991.
- 21 Nikolas Rose, *Powers of Freedom*, 1999, pp.21-22.
- 22 Nikolas Rose, Governing "advanced" liberal democracies, in Andrew Barry, Thomas Osborne and Nikolas Rose (eds.), *Foucault and Political Reason*, 1996, p.41.
- 23 Nikola Rose & Peter Miller, Political power beyond the state: problematics of government, *British Journal of Sociology*, Vol.43, No.2, 1992, p.179.
- 24 Nikolas Rose, *Powers of Freedom*, p.29.
- 25 *Ibid.*, p.22. したがって、『性の歴史 I 知への意志』で議論された生の政治や生物学的とも言うべき国家のテクノロジーは、統治ということと関連づけてみることもできる。統治されるべき領域・対象を問題構成し、その領域・対象のありよう——出生や人口成長率、民族などの遺伝体質に影響を与える要因——を編み上げ、それに対して政治的・行政的に働きかける戦略であった。(*Ibid.*, p.22.)
- 26 Nikolas Rose, Governing "advanced" liberal democracies, pp.41-42, Nikola Rose & Peter Miller, Political power beyond the state, p.183.
- 27 Mitchell Dean, *Governmentality*, 1999.
- 28 ゲルハルト・エストライヒは、初期近代ヨーロッパにおいて、この言葉がより一般的な意味で用いられていたことを論じて、次のように述べている。「一六世紀初頭以降は「ポリツァイと良き秩序」という対語的表現が圧倒的に多くなる。……「ポリツァイ」とは、都市あるいは領邦という共同体の良き秩序を実現すべき統治というほどの意味である。」(千葉徳夫訳『ポリツァイと政治的叡智』坂口修平他編訳『近代国家の形成——新ストア主義・身分制・ポリツァイ』, 創文社, 1993年, 128-129頁。)
- 29 Ian Hunter, *Culture and Government*, 1988, *Rethinking the school: Subjectivity, bureaucracy, criticism*, 1994.
- 30 James Phillips Kay, *op. cit.*, pp.19-20.
- 31 Webb, S. & B., *English Poor Law History, PartII: The Last Hundred Years*, Vol.I, p.206, 三好信好『イギリス公教育の歴史的構造』亜紀書房, 1968年, 151頁。
- 32 *Minutes of the Committee of Council on Education, 1839-40*, p.1.
- 33 Nancy Ball, *Her Majesty's Inspectorate 1839-1849*, p.63.
- 34 *Minutes of the Committee of Council on Education, 1839-40*, p.22.
- 35 *Minutes of the Committee of Council on Education, 1839-40*, pp.25-45. たとえば、視学官のトレメンヒアによる「南ウェールズの鉱山地区における初等教育の状態についての報告書 (Report of Mr. Seymour Tremenheere on the State of Elementary Education in the Mining District of South Wales, in *Minutes of the Committee of Council on Education, 1839-40*.)」はこう述べている。「この地区の物質的側面、そして人口が散らばって住んでいる様子を一瞥しさえすれば、教育の状態をざっと調査するだけでは、これらの人里離れた谷で成長した社

- 会状態におけるもっとも顕著な特徴を活写するような、多くのテーマを置き去りにすることとなる、ということが明らかになる。このようなテーマが教育状態の調査から当然のことながら惹起されるのはいつも、そして人々の道徳的や知的状態と関連しているように見える際にはいつも、私はこのテーマを見逃さなかった。」この報告書のなかには学校に関しての観察はもちろんのこと、労働者階級の生活全般、たとえば、パブ、喫煙、飲酒、ギャンブル、早婚、相互扶助クラブなどへとまなざしが注がれている。
- 36 Nancy Ball, *op. cit.*, p.68. 「指示」には書簡が付されており、ケイはそのなかで視学官の義務について自らの考えを思う存分展開していた。視学官がすべきことは事実を調査したり、報告したりすることよりももっと包括的なものであり、枢密院教育委員会の目的とするところは、教育の進歩のための地域の努力を奨励することであり、視学官の査察は、そのような努力をしている人たちに、改善がなされつつある「教具や内部造作、学校経営や規律、教授メソッド」を学ぶ機会を提供することである。
- 37 J. G. Fitch, *Thomas and Matthew Arnold*, 1897, p.169, quoted in E. L. Edmonds, *The School Inspector*, pp.48-49. ケイの退職の際には、視学官は国民協会のためには8人、内外学校協会とウェスレイ派のためには2人、ローマ・カソリックのためには1人となっており、1847年以降は教員養成学校のためにさらに1名が加わった。
- 38 I. Hunter, *Culture and Government*, p.106.
- 39 E. L. Edmonds, *op. cit.*, p. 50, ch.6.
- 40 紙幅の関係上ここでは割愛せざるをえないが、『マンチェスターの状態』の附録には質問表が添付されている。
- 41 Ian Hunter, *Culture, Bureaucracy and the History of Popular Education*, in Denise Meredith and Deborah Tyler (eds.), *Child and Citizen: geneologies of schooling and subjectivity*, 1993, pp.27-28.
- 42 *Ibid.*, pp.28-29.
- 43 *Report from Select Committees on the State of Education, together with the Minutes of Evidence, and index*, 1838, ちなみに、1833年にケリー卿 (Lord Kerry) の動議に基づいてなされた、一般にケリー報告書とされる教育調査報告書の信頼性については、調査を担当するエージェントがいなかったためもあり、それほど高い評価がなされていなかった。1838年の下院特別委員会報告書は、その不備を補うために、マンチェスター、バーミンガム、ロンドンの各統計協会報告書を追加し、それらを検討材料としている。教育中央協会はマンチェスター統計協会の教育報告書を分析した際に、ケリー報告書をフィクションだとして捨てている。「事実は物質科学を経験主義から救い出した。事実は教育に対しても同じような助けとなる役割を果たそうとしている。事実を得ようと努力がなされている際に、1833年の下院で故ケリー卿の動議にもとづいて、政府に対して提出された報告書に見られるように、フィクションが提供されていることを嘆くべきである。」(Analysis of the Reports of the Committee of the Manchester Statistical Society on the State of Education in the Boroughs of Manchester, Liverpool, Salford, and Bury, by Editor, in *Central Society of Education*, first publication, 1837 (rep. 1968), p.292.) 回状形式による報告よりも、雇われたエージェントが学校や家々を訪問することで得た情報の方が信憑性があるとされて

いる。)

- 44 Introduction, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.1, p.2.
- 45 *Ibid.*, p.1.
- 46 *Ibid.*, p.3.
- 47 Fourth Annual Report of the Council of the Statistical Society of London, in *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.1, p.8.
- 48 Sixth Annual Report of the Council of the Statistical Society of London, in *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.3, p.2.
- 49 Objects of the Society in *Central Society of Education*, first publication, p. 25.
- 50 Introduction, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.1, pp.4-5.
- 51 Ian Hunter, *Rethinking the School*, p.71.